

波多野流平曲の古譜本について

奥村, 三雄

<https://doi.org/10.15017/2332676>

出版情報 : 文學研究. 79, pp.15-43, 1982-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

波多野流平曲の古譜本について

奥村三雄

本稿はいわゆる波多野流平曲譜本の多様性という事に関連して、その古譜本を考えようとするものであり、『平曲譜本の研究』（昭和56年桜楓社刊）30頁の記述に連る。

〔1〕従来においては、「前田流の譜本が多種多様であるのに対し、波多野流譜本は概ね同文同譜」というような説（『文学』昭和28年2号や勉誠社刊『波多野流節付語り本（6）』821頁など渥美かをる氏記述）が有力だが、実際問題としては必ずしもそうは言えない。

〔1.1〕さし当り京都大学国文研究室本（京と略称する）・東京大学蔵松岡仲良写本（松と略称する）の二書などは、波多野流譜本中でも相互によく似たものと言えるが、それでも次の如き譜記差が数多認められる。

帰られ (㊦) (㊦) || 一 (京7下255初重) 一て一 (松)、うち送り (㊦) || 下 (京255初重) 一 下 (松)、程 (㊦) || ア (京257拾) 一ア (松)、惜しみ (㊦) || ア (京255初) 一ア (松)、名残 (㊦) || 下 (京254初重) 一 (松)、参り (㊦) || 一 (京247指声) 一 下 (松)、行幸 (㊦) || 下 (京257拾) 一 (松)、行きなん (㊦) || 一 (京256歌) 一 (松)、申され (㊦) (㊦) (㊦) || 下 (京251下ケ) 一 × × × (松)、童形 (㊦) (㊦) || 一 (京253中音) 一 × × (松)、なさん (㊦) (㊦) || 一 (京251折声) 一 × × (松)

波多野流平曲の古譜本について（奥村）

（注）右記において最初の例は次の如き意味を表わす。——京大本7下55頁初重における「帰られ」の第三・四拍（られ）には、「1」の如きハカセが認められるが、松岡本ではその部分が「て1」の如く譜記される。その他も概ねこれに準ずる。

※ 京大本の頁数は勉誠社の影印本による。

※ 松岡本については、本稿〔6.2〕項にその巻7下第二冊「経正都落」の冒頭部分を影印紹介した。京大本については勉誠社刊の影印本を参照されたい。

右記は、特によく似た譜記の両書を比較したものであり、その他の譜本に関しては、当然これ以上の差が種々認められる。

〔1.2〕尤も、それらも見方によっては概ねユレの程度であり、「同文同譜」説に対する積極的な反証ではないかもしれない。しかしここで特に注目すべきは、山口県立図書館蔵の『秦音曲鈔』や『小秘事』、同文書館蔵の『平家語本』など、異色ある波多野流古譜本がいろいろ認められる事だろう。更には藤井雪堂の『平語偶談』（国会図書館蔵）や『追増平語偶談』（静嘉堂文庫蔵、前者の増補本）の「曲節名目」、『平語偶誌』（高橋貞一氏蔵、『偶談』の転写本）の「波多野流古来節名目」、「当道用集統筆の節名目」（京大蔵波多野流本巻一上に引用）等によれば、右記山口図書館本の類以外にも異色ある古譜本の存在が想定されるのである。

その辺の事情については拙著『平曲譜本の研究』でも或程度述べた所があるが、ここではとりあえず右記『秦音曲鈔』（及び『平家語本』）を中心に、もう少し考察を加えようとする。なお本稿〔6.2〕稿では、『秦音曲鈔』巻7下及び『平家語本』巻14の「経正都落」冒頭部を影印紹介した故、参照されたい。

〔2〕『秦音曲鈔』は十二巻の上下で計二十四冊の完本。多賀神社旧蔵本として山口県立図書館に蔵される。外題「秦音曲鈔」、内題「平家物語」。六行本で一行平均約十八字。全巻にきめ細かく節ハカセが付されている。

巻十二下の末に次の如き跋文が存する。「……平家……余之ヲ好ムコト久シ……則琵琶ヲ鼓シテ歌フ……其書十二巻……披

見ニ不便、繁沢一外翁余ト嗜ヲ同ウス、頃嘗テ余カ為ニ親ク自ラ筆ヲ砥テ譜本一部ヲ写ス、因テ分テ二十四卷ト為ス、甚輕便、且翁齡懸車ヲ超エ筆力猶ニ爾稚、健想テ其人ヲ見ツ可シ……享保十四年歲次己酉孟昏日粟屋右近源元忠 謹書」

そして各巻の末にもやはり「源元忠」と記される。

(注) この譜本に關し『平曲譜本の研究』31頁で、「奥書識語の類がない」とあるのは、同じ図書館所蔵の『小秘事』について記すべき(同右書40頁)事がまぎれこんだもの。奥書識語がないという記述そのものは誤りではないが、奥書識語の類がないとは言えないわけである。

所で享保十四年(1729)と言へば、書写年代の明らかな波多野流譜本としては最古のものと言へべく、明和六年の松岡本や寛政十一年の岸部檢校本『小秘事』よりもそれぞれ四十年・七十年古い事になる。跋文の筆者源元忠、及びこの譜本の筆者と思われる繁沢一外翁については未詳だが、何れにしてもその内容は享保十四年成立の譜本でなく、それ以前からあつた譜本の転写本という事になる。

而してこの書が波多野流本である事は、「秦音」の表題や、「祇王」の句が「我身榮花」の次におかれる事実などからも一おう察せられる所である。

[2.1] かくしてこの書がいわゆる波多野流の古譜本である事は、外的徴証の面からも或程度推察できるわけだが、この事はまた内部徴証の面からも承認できる。さし当り『秦音曲鈔』(ここでは秦と略称する)の詞章や節ハカセを、波多野・前田両流諸譜本及び一方流諸本と比べてみると、下記[6.1]項(A)(B)の如くである。

以下これについて若干の考察を試みよう。

[3] ここで先ず注目すべきは、前記『平家語本』(ここでは語と略称する)との關係だろう。もともと秦はかなり特異な譜本と言えるが、語との關係だけは酷似とも言へべき状態を示す。秦の詞章や譜記が語とのみ一致し、他の諸

本と対立する例については、下記〔6.1〕項（A）の（イ）や（B）の（イ）（ウ）等にその一部を示したが、この種の例は他にも多い。

さし当り秦語両書に認められる〔夕〕の如きも、その例と言えよう。尤もこれは「中将（秦7下97口）・中納言（同99拾）・侍従（同98拾）・仲快（同99拾）」など、他譜本の割ル注記に対応すべき場合が多く、発音注記的な意味が多いかと思われるが、ともあれ他の譜本類ではちよつと見当らない所である。

また曲節については詳述しないが、大体の方向としてはやはり詞章や譜記の場合に準ずる。例えば秦語両書の口説が、波多野・前田両流諸本の中音（秦8上443行めの部分）・初重（秦7下862行め）・下ケ（同741行め）・指声（同853行め）等に対応するというような現象を、数多認め得るのである。

〔3.1〕 秦語両書の間には、直接的な親子関係とは言わないまでもかなり親しい関係が想定されよう。もともと語は秦と同じく「防陽多賀神社文庫」旧蔵本として山口県立文書館（図書館から分れたもの）に蔵されており、或意味での関係深さを思わせる。そう言えば山口図書館には同じ多賀神社文庫旧蔵の『小秘事』があるが、その譜記形象もやはり秦や語に準ずるものなのである。『平曲譜本の研究』94頁も参照の事。

内部徴証的に見て、秦語両本がほぼ同文同譜と言うべき状態にある事は、下記〔6.1〕項諸例を一見して明らかだろう。特に本文詞章等の面では殆んど差が見られないのである。

〔3.2〕 ただしこの場合、その両書間に直接的な親子関係を認める事は難しそうである。例えば下記〔6.1〕項（B）の（イ）諸例の如き譜記差等も、一おう揺れの程度に留まるとは言えるが、しかし直接的な転写関係を想定するのは、ちよつとはばかられるものがある。

〔3.21〕 特に秦の場合はその跋文からして或譜本の忠実な転写本と見られるが、その底本が語の如き姿でなかった事は言をまつまい。即ち語は、その巻十二に「紅葉・葵前・小督」の三句を収め、巻十三に「竹生鳥詣・俱梨迦羅落・

主上都落・維盛都落」の四句を収めるといふ調子の抜萃本なのである。

3.22 而してまた逆に、語を秦からの直接的抜萃本と見る事も難しい。下記〔6.1〕項(B)の(イ)の如き譜記差の面の他、例えばその組織面を見ても、語の基づいた譜本は秦と異なり、十二卷(流布本等の)のそれぞれを上下に分かたない形のものであったかと思われる。即ち語の卷13・卷20・卷21には、それぞれ秦の卷七上下・卷十上下・卷十一上下の所屬句が収められるのである。

更に秦は語に比べて、誤脱表記かと思われる現象がまま認められる事なども気になる。さし当り下記〔6.1〕項(B)の(イ)等は譜記面におけるその例と言えるが、また詞草面でも、やはり次の如きが或程度見られる。

かけさじ(秦7下107) ↓させ(語)(諸本)、忘れたる×有り(同89・左横に「事」と加筆) ↓事(語)(諸本)、雲×(秦8上46・上欄外に「客」と加筆) ↓客(語)(諸本)

(注) 右記において、最初の例は次の如き意味を表わす。——秦7下107頁「かけさじ」の部分は語はじめ譜本で「かけさせじ」とある。
※即ち↓印は波線部分のみの異同を示すわけである。

3.3 なお問題は残されそうだが、要するにここでは、秦を△語とごく親しい関係にある譜本からの抜萃本▽と考
えたい。

3.31 所で抜萃本と言えば語の譜記は下記〔6.1〕項(B)の(イ)諸例の如く秦のそれを簡略化したような形象が多いが、
或種の稽古本の類と見るべきか。

それに関連して、「スム・ツメ・ハナ」の如き発音注記も語より秦に多いようだが、これもやはり簡略化の例と言えよう。左記は何れも秦の発音注記のうち、語にそれが欠けているものの例である。

スムー童形(秦7下71)・上玄(同86)・前途(同102)・比叡山(同103)・神器(同115)・台(同119)、ツメー九月十三夜(秦8上49)、ハナニー蟋蟀の(秦7下120)

波多野流平曲の古譜本について(奥村)

〔注〕右記の例では、それぞれ、傍線部に各発音注記が認められる。

〔3.4〕ともあれ秦と語とがごく近い関係の譜本である事は動かない。また同じ図書館に蔵される『小秘事』もこれに準ずる譜本と見られるわけだが、この事はさし当り次の如き意味で注目される。即ち、波多野流譜本は従来からも説かれる如く概ね同文同譜のものが多。従って、秦の如き特異な波多野流本があつても孤立的存在であるならば、それは△ごく影の薄い一時的なもので、実用面での使用も稀だつた▽という考え方ができそうだが、実際問題としてその考え方は通らない。秦の跋文によれば、これら三書の他にも同種の先行譜本があつたらしいし、特に語の場合は或種の稽古本だつた可能性も存する事など、前述の如くである。

〔4〕前記の如く秦語の両譜本はいろんな面で特異性が著しいが、いわゆる波多野・前田両流諸譜本と比べて見た場合、波多野流本との共通性が著しい事、勿論である。

〔4.1〕これら両書と波多野流本との共通性は、下記〔6.1〕項(A)の(イ)や(B)の(ウ)と(エ)等諸例を一見しても或程度明らかならずだが、さし当り譜記の面で「 \sim 」 \cdot 「 \sim 」の類や「 \sim 」 \cdot 「 \sim 」など、何れも波多野流本と一致または酷似している。また「 \sim 」 \cdot 「 \sim 」の類や「 \sim 」 \cdot 「 \sim 」なども、それぞれ波多野流本の「 \sim 」 \cdot 「 \sim 」や「 \sim 」 \cdot 「 \sim 」に似ていると言えよう。

更に「 \sim 」 \cdot 「 \sim 」の如き線条式ハカセは、必ずしも波多野流本の特徴とは言えないが、その用法に関しては、やはり下記〔6.1〕項(B)の(163)と(165)など、両書と波多野流本との共通性がめだつのである。

その他、白声曲節が確立しており、それが譜記を欠く点で口説と区別される事なども、波多野流本のみの特徴とは言えないが、波多野流本に著しい傾向とは言えよう。『平曲譜本の研究』147頁と170頁と等参照の事。

それに関連して、「 \sim 」 \cdot 「 \sim 」の如き節ハカセに関する下記〔6.1〕項(B)の(イ)諸例なども、概ね右記に準ずる。即ちそれらも巨視的には、一おう秦語両書及び波多野流諸本に著しい傾向と言ふべく、例外は前田流の也有本『平語』や

幸」間物の詞章であり、平家正節・也有本以外の前田流譜本にその部分が欠けているという事情を考え合わせるべきかもしれない。古い前田流本にこの部分の詞章があれば、秦語両本と異っていたかもしれないのである。

〔4〕³ 所で秦語両書を波多野流譜本と見た場合、さし当って問題となるのは『国語国文学研究史大成（9）』247頁等で、山口県立図書館蔵の『平家語書』及び『小秘事』が前田流譜本に含められている事だろう。この『小秘事』は「山口県立図書館蔵、多賀神社文庫旧蔵」と記される故、本稿で波多野流古譜本と見なした秘を指すはずである。一方、『平家語書』という譜本は山口図書館にないし、以前にも所蔵されていた形跡がない故、やはり本稿で波多野流古譜本と見なした語つまり『平家語本』を指すと考えたい。恐らく「む（本）」が「ま（書）」に見誤られたのだろう。

右記『国語国文学研究史大成（9）』でも、『平家語書』は『小秘事』と同譜形と記されるが、その点でも現存『平家語本』と揆を一にする。『平家語本』は山口県立文書館所蔵だが、これは同図書館から分れたものである故、その点の問題がない。

〔4〕³¹ なおこれらが従来、前田流譜本とされた事の背後には、やはり△波多野流譜本は概ね同文同譜であり、このような特異な譜本はないはず▽という考え方が働いたと想像されるのである。『平曲譜本の研究』40頁ノ等も参照の事。

〔5〕 前記の如き観点からすれば、秦語両書が波多野流譜本類と異なる例は概ねそれらの特異性という事になりそうだが、ここで注目すべきは、それらの中にいろんな意味で古色を保つらしい例が多い事だろう。

〔5〕¹ 下記〔6〕¹ 項(A)の(向)の如きはその代表的な例と言える。即ちそれらは何れも、秦語両書の本文詞章が波多野・前田両流譜本類と異なり、覚一本・葉子本などの一方流古本と一致するのである。さし当りその例（16）の場合には、次の如き考え方ができる。——覚一本・葉子本などで「（申され）けれ」とあったのを、時房本・流布本が「たりけれ」と改め、それが前田流にうけつがれた。それに対し秦語、つまり初期波多野流本は覚一本等の形に復したが、新しい波多野流本は流布本などの形に従った。

5.11 節ハカセの場合はそのような考察は難しいが、しかし次の如く、古色と見るべき例は数多認められる。

例えば「ウ・フ・ク」の如き譜記は、秦語以外の譜本類では稀だが、『平語偶誌』（高橋貞一氏蔵）の「波多野流古来節名目」に認められる。特に「ウ」の場合は、その譜記形象も右記「古来節名目」と一致するし、またその用法も下記「6.1」項(B)の(四)諸例の如く、概ね諸譜本の浮うきに対応しており、「古来節名目」と一致する。「ウリ」の場合はその名称が右記「古来節名目」や『追増平語偶談』（静嘉堂文庫蔵）の「節名目」と一致する。尤もその譜記形象や用法には必ずしも一致しない面がありそうだが、ともあれ「クリ上」という節ハカセは、秦語両譜本以外では稀なものであるとして興味をひく。

また京松などいわゆる波多野流諸譜本の節ハカセには、「コ（断ことわり）」、「ウウ」など、秦語の譜形（それぞれ「コト」「ウウ」）に対する略記法の類がしばしば認められるが、その逆の例はない。而してこの種の略記法も一般に新しい姿と見るのが普通だろう。その両者に関し秦語秘諸譜本では、更に丁寧な譜形「コトコト」の如きも認められるのである。

『平曲譜本の研究』164頁も参照の事。

5.12 一方、秦の目録では「鱸付禿童、新大納言死去付徳大寺殿島詣、山門滅亡付善光寺炎上、有王嶋下井僧都死去」等々、二つの句をつないだ形式が数多存していて、京松の類をはじめ波多野・前田両流譜本と異なるが、この秦の形式は流布本の目録とはば一致する。これもやはり、初期波多野流本の秦は流布本の形式を踏襲したが、新しい波多野流本ではそれを改めたと見るべきだろう。

5.2 以上、秦語両書が波多野流譜本の古い姿を示すと見るべき諸現象をとり上げたが、更に言えば本稿で秦語両書のみの特異性と見なしたものの中にも、これに準ずる例が含まれている可能性がある。

5.21 例えば秦語の譜記には、次の如く金田一春彦氏蔵『平家書』（金と略称）と似た面が認められるが、これもやはり或意味で古い姿である事を思わせる。「金を室町中期の譜本と見なす」説（『国語アクセントの史的研究』302頁や『中

央公論』昭和51年11号等金田一春彦氏記述) 自体には問題が残るとしても、これが相当古い譜本である事は動かない。『平曲譜本の研究』18頁〜等も参照の事。

左記は何れも秦語の譜記が金に似ている例である。

(イ) 「 \sim 」の類は金と一致する場合が多い。

(i) 「 \sim 」(秦語金) — 「 \sim 」(京松) — 「 \sim 」(尾) の例。近江(○秦9上23拾)、乱杭(末同24初)

(ii) 「 \sim 」(秦語金) — 「 \sim 」(京松尾) の例。範頼(○同22拾)、義経(○同23拾)、人々(○同22拾)、その(末同24拾)

(iii) 「 \sim 」(秦語金) — 「 \sim 」(京松) — 「 \sim 」(尾) の例。折節(末同25三)

(ロ) 秦語の「 \sim 」などは、それぞれ金の「 \sim 」に対応する事が多い。

(i) 「 \sim 」(秦語) — 「 \sim 」(金) — 「 \sim 」(京松) — 「 \sim 」(尾) の例。国(末同23拾)、経て(末同24拾)

(ii) 「 \sim 」(秦語) — 「 \sim 」(金) — 「 \sim 」(京松) — 「 \sim 」(尾) の例。押し(○同24拾)、大綱(○同24拾)

(イ) 「 \sim 」や「 \sim 」の用法についても、秦語と金との一致例がしばしば認められる。

(i) 秦語金の「 \sim 」が波多野流・前田流諸譜本の「 \sim 」の類に対応する例。馬を(同21)

口、大手(同22拾)、武田(同22拾)、熊谷(○同23拾)

(ii) 右に関連して、秦語の「 \sim 」が金の「 \sim 」に対応し、諸譜本の「 \sim 」と対立する例。大將軍(○同22)

拾、御曹司(○同22拾)、相伴ふ(○同22拾)

(注) 右記において(i)の例により次の事がわかるわけである——。「近江」(秦9上23頁拾)の第二拍部分(フ)及び「乱杭」(同24頁初重)の語末部分(ヒ)の譜記を調べてみると、それぞれ秦語金は「 \sim 」、京松は「 \sim 」、尾(尾崎本平家正節の略称)は「 \sim 」の如き対応を示す。

また(i)のii)の例の場合は、「大將軍」の第一・二拍部分(タイ)の譜記が、「 \sim 」(秦語)・「 \sim 」(金)・「 \sim 」(諸本)の如き対

応を示す事になる。

※ 譜記比較に当っては、管見の範囲内ですべての譜本をとり上げたわけだが、ここでは秦語金の三本の他、波多野・前田両流譜本の代表として京松及び尾の諸本を例示した。

※ 譜記比較の示し方については下記〔6.1〕の説明をも参照の事。

〔6〕 以上△(i)山口県立図書館蔵の『秦音曲鈔』は繁沢一外翁が先行譜本を転写したものであり、詞章・譜記ともに特異性がめだつたが、一おう波多野流の古譜本と見なされる事。(ii)同文書館蔵の『平家語本』は、それとごく親しい関係にある譜本からの抜萃本である事。(iii)同図書館蔵の『小秘事』は、右記両譜本から京松の如き波多野流本への過渡期的性格を示す事▽等を述べた。そこから波及する問題・発展させるべき問題は誠に多いが、それらはすべて別稿をまつ事とし、以下とりあえず本稿の資料編として△秦の詞章や譜記と、語はじめ波多野・前田流諸譜本及び一方流諸本との比較対照例▽を掲げ、最後に参考として△秦(巻7下)及び語(巻14)・松(巻7下第二冊)の「経正都落」冒頭二頁分▽を影印紹介しよう。

〔6.1〕 詞章・譜記対照例一覽(その表示法等は後で説明する)

(A) 本文詞章対照例

(i) 秦語両書の特異性

(1) つかまつる(秦7下72・語) ↓り候ひし(京松尾吟也豊ヨトル)、(2) 候ひぬ(同73・語) ↓候へば(京松尾吟也豊トル)、(3) 筑紫で(同8上41・語) ↓にて(京松尾也カヨトル)、(4) かひぞなき(同41・語) ↓×(京松尾也カヨトル)、(5) 然らば(同41・語) ↓さらんには(京松尾也カヨトル)、(6) ×木曾が(同41・語) ↓高倉宮の御子の宮を御乳母讃岐守重秀が御出家せさせ奉り具し奉つて北国へ落ち下ったりしを(京松尾ヨトル)、(7) 参らっさせ奉ふべき(同41・語) ↓参らせんずらん(京松尾也トル)、(8) 参らっさせ(同42・語) ↓奉る(京松尾也

波多野流平曲の古譜本について(奥村)

カヨトル)、(9) 新中納言知盛卿進み出て(同42・語) 一人々(京松尾也ヨトル)、(10) たとひさ候へばとて木曾な
 んどが主にし奉つたる還俗の宮をばいかでか(同42・語) いかでか還俗の宮をば(京松尾也ヨトル)、(11) 入らせ
 (同43・語) 一にげこもらせ(京松尾也ヨトル)、(12) ×主に(同41・語) ↓上洛の時(京松尾也ヨトル)、(13) し奉
 ったる還俗の宮をば(同41・語) 一し参らせんとて還俗せさせ奉り具足し奉って都へ上つたるをぞ(京松) 尾也ヨト
 ル・それぞれ小差あり)、(14) 後悔せられけれども(同41・語) ↓ば(尾也カ) 一申し合はれければ(京松ヨトル)、
 (15) 都には(同44・語) 一太上天皇(尾也) 一×(京松ヨトル)

(ロ) 秦語両書が古色を示す例

(16) 申されけれ(秦7下76・語カヨ) ↓たりけれ(京松尾吟也豊トル)、(17) これ(同8上41・語カ) 一この由
 (京松尾也ヨトル)、(18) 聞いて(同41・語ヨ) ↓き給ひ(京松尾也トル)、(19) 安からぬ(同41・語) 一あはれ(京
 松尾也トル)、(20) 申せし(同43・語ヨトル) ↓せ(京松尾也)、(21) 奉つたる(同44・語カ) ↓参らせ(京松尾也
 ヨトル)、(22) 還俗の宮×(同44・語カヨ) ↓なれば(京松尾也トル)、(23) 太上法皇(同44・語ヨトル) ↓天(京
 松尾也カ)、(24) 回廊には(同46・語カ) ↓は(京松吟也豊ヨトル)

(ハ) 秦語両書の波多野流本的性格

(25) 自から高らかに(秦7下72・語京松) 一×(尾吟也豊カヨトル)、(26) 申され(同72・語京松) ↓し入れら
 (尾吟也豊カヨトル)、(27) この後もし(同76・語京松) 一もし(尾吟也豊カヨトル)、(28) もし(同76・語京松) 一
 もしふしぎに(尾吟也豊カヨトル)、(29) 立帰る(同76・語京松) 一都へ立帰る(カヨトル) ↓帰り上らせ給ふ(尾
 吟也豊)、(30) 袂にすがり名残を惜しみ(同77・語京松) ↓b aの順(尾吟也豊トル)、(31) 惜しみ×(同78・語京
 松) ↓参らせて(尾吟也豊トル)、(32) この人(同78・語京松) ↓×(尾吟也豊カヨトル)、(33) 続けらる(同78・
 語京松) ↓給ふ(尾吟也豊カヨトル)、(34) 聞き(同8上41・語京松) 一伝へ聞き(尾也カヨトル)、(35) 木曾(同

41・語京松)―義仲(尾也ヨトル)、(36)付かせ給ひ(同43・語京松)―申し(尾也カヨ)、(37)立てられける(同44・語京松)↓る(尾也カヨトル)、(38)幼少(同7下71・語京松カヨトル)―いまだ幼少(尾吟也豊)、(39)覚えぬ(同73・語京松カヨトル)―存じ候はぬ(尾吟也豊)、(40)必ず立帰る(同73・語京松トル)↓×(尾吟也豊カヨ)、(41)とぞ申されける(同74・語京松カヨ)―と申されたりければ(尾吟也豊)、(42)入たる(同75・語京松カヨ)―入たりける(尾吟也豊トル)、(43)筑紫(同8上41・語京松ヨトル)―西国(尾也カ)、(44)下るべき(同41・語京松ヨトル)↓かりし(尾也カ)、(45)×大伴皇子(同43・語京松カヨトル)↓大和国宇多郡をすぎさせ給ふにはその勢僅かに十七騎されども伊賀伊勢にうちこえ美濃尾張の軍兵を以て(尾也)、(46)まして(同44・語京カヨ)―沉んや(尾也トル)、(47)給ひき(同43・語京松カヨトル)↓にき(尾也)、(48)皆(同45・語京松カヨトル)―×(尾也)、(49)ありけり(同46・語京松尾カヨトル)↓るとかや(貞吟豊)

(二) 秦語両書が前田流本に似ている例―例外的存在

(50) 取り(秦8上41・語尾也カ)―具し(京松ヨトル)、(51)我朝には×(同42・語尾也)↓先づ(京松カヨトル)、(52)給ひしか(同43・語尾也)↓たりしか(京松ル)・たりしかども(カ)・たりけるが(ヨ)・て(ト)、(53)さる程に(同44・語尾也)―×(京松カヨトル)、(54)×平家は(同45・語尾貞吟豊ヨトル)↓さる程に(京松カ)

(B) 譜記対照例

(イ) 〽 ― 概ね諸譜本の^{おほまはし}大廻〔波フ・尾ろ〕の類に対応する事が多いが、諸本の「」に対応する例もかなりある。

(i) 「」(秦語)―「」(京松也)―「」(吟)―「」(尾豊)の例。(1)至る(同77中)、(2)続けらる(同78初)、(3)奉らる(同80拾)、(4)御子(末78中)、(5)飽かず(77歌)、(6)数輩の(末77中)、(7)名残(末72折)ばかり(末72折)

(ii) 右記(i)に準ずるが、豊は「エ・エ・沖・下」の類。(8) 流し(○78中)、(9) 候ふ(○78中)、(10) 中にも(○78中)、(11) 出でられける(○77中)、(12) 申されける(○75下ケ)、(13) なかり(末78中)、(14) 光頼ツカヨウライの(末78中)。(15) 飽かぬ(末77歌)、(16) 参られけり(末75拾)

(iii) 右記(ii)に準ずるが尾も「五・ろ」など。(17) 御坪ミツツボに(末75拾)、(18) 帰られけるが(末78初)

(iv) 右記(iii)に準ずるが、豊は「引」など。(19) 高紐タカヒモ(○74拾)、(20) 返事に(末79下ケ)、(21) 下クダされて(末

77下ケ)

(v) 「ハ」(秦語)「フ」(京松吟也尾豊)の例。(22) 挟み(○74拾)、(23) 集まり(○79拾)、(24) 上げさせ

(○75拾)、(25) 萌黄句モエギエホヒ(○74拾)、(26) 長覆輪ナガフツリン(○74拾)、(27) 持たせられ(○79拾)、(28) 我は(末79歌)

(ロ) 「ウ」下—それぞれ概ね右記「ハ」に準ずる。

(i) 「ウ」(秦語)「ハ」(京松也)「ハ」(吟)「ハ」(尾)「ハ」(沖(豊))の例。(29) 仰せけれ(○74下ケ)

(ii) 「ハ」下(秦語)「ハ」(京松也)「ハ」(吟)「ハ」(尾豊)の例。(30) 大納言(○78中)、(31) ぬらさ

ぬは(末78中)

(イ) 「ア」下記「ア」に準ずる場合が多い。

(i) 「ア」(秦語)「ア」(京松豊)「ア」(吟也)「ア」(尾)の例。(32) 後の(末77歌)、(33) 寛カケヒの(末77歌)

(ii) 右記(i)に準ずるが尾は「ウ」。(34) 後オクれ(末79歌)

(ロ) 「ア」概ね波の「ウ」、尾の「ア」上よみあげ(振上)に対応する事が多い。

(i) 「ア」(秦語)「ア」(京松吟)「ア」(也)「ア」上(尾)「ア」上ル(豊)の例。(35) 脇カクに(末74拾)、

(36) 經正ツネマサ(末74拾)

(ii) 右記(i)に準ずるが豊は「上」。 (37) 馳せ (末79拾)

(甲) アー次の如く概ね右記「ア」に準ずるが、京松は「〜」。 「ア(秦語)」ー「〜(京松吟也)」ー「上(尾)」ー「上ル(豊)」の例。 (38) 持たせ (79拾)、 (39) 萌黄匂 (74拾)

(乙) イー波の「引」、尾の「ハ(持)」などに対応する事が多い。

(i) 「ア(秦語)」ー「引(京松)」ー「〜(吟也)」ー「ハ(尾)」ー「引(豊)」の例。 (40) 老木 (79歌)、 (41) 別る (77歌)

(ii) 右記(i)に準ずるが豊は「モ」。 (42) うち送り (78初)

(乙) イー概ね右記「ア」に準ずるが、波の「ハ(引)」ー「〜」に対応する例もある。

(i) 「ア(秦語)」ー「引(京松)」ー「ハ(尾吟也)」ー「引(豊)」の例。 (43) 遠く (79歌)、 (44) 官 (77歌)

(ii) 「ア(秦語)」ー「ハ(京松)」ー「〜(吟也)」ー「ア、ハ(尾)」の例。 (45) 思ひ (78初)

(甲) イー上ー原則として張の類に対応する事が多い。

(i) 「ア(上(秦語))」ー「ハ(京松)」ー「ハ(尾)」ー「ハ(尾)」ー「ハ(尾)」の例。 (46) 雲居 (122中)

(ii) 右記(i)に準ずるが、京松は「ル」、豊は「ハ」。 (47) 前途 (102中)

(ウ) アー原則として波の「ア」または「ア」に対応し、前の「ハ・ハ・て・ア」の類に対応する。
(i) 「ア(秦語)」ー「ア(京松)」ー「て(吟也)」ー「ハ(尾豊)」の例。 (48) 今日 (秦7下72折)、 (49) 数輩 (77中)、 (50) 哀れ (79歌)、 (51) 斯うぞ (78初)

(ii) 右記(i)に準ずるが、京松は「ア」。 (52) 時 (78中)、 (53) 惜しみ (78中)、 (54) 童形 (77中)、 (55) 仰

せ（㊦74下ケ）、（56）下され（㊦77下ケ）、（57）大床へこそ（㊦75拾）、（58）名残ばかり（㊦72折）、（59）果て（末

72折）、（60）老木（末79歌）、（61）遠く（末79歌）、（62）申され（末75下ケ）、（63）別るる（末77歌）

(iii) 「ア（秦語）」―「ㄣ」（京松吟）―「て（也）」―「ハ」（尾豊）の例。（64）惜しみ（㊦78中）、（65）童形（㊦77中）、（66）流し（㊦78中）、（67）飽かずして（㊦77歌）、（68）時（末78中）、（69）中にも（末78中）、（70）御子な

り（末78中）、（71）参られけれ（末75拾）、（72）奉らる（末80拾）

(iv) 「ア（秦語）」―「ㄣ」（京松吟也尾豊）の例。（73）形見（㊦77歌）、（74）早め（㊦80拾）、（75）先だち（㊦79

歌）、（76）高紐（㊦74拾）、（77）君（末77歌）、（78）水（末77歌）、（79）中（末77歌）

(又) ア_下―概ね右記の「ア」に準ずる。

(i) 「ア_下（秦語）」―「ㄣ」（京松）―「ㄣ」（吟尾）―「て（也）」―「∨」（豊）の例。（80）御子（㊦78中）

(ii) 「ア_下（秦語）」―「ㄣ」（京松）―「ㄣ」（吟也尾豊）の例。（81）参られ（㊦75拾）

(iii) 右記(ii)に準ずるが、京松は「ア_下」。（82）替れども（㊦77歌）

(iv) 右記(ii)に準ずるが、京松も「ㄣ」。（83）坊官（㊦77中）、（84）おはせし（㊦78中）、（85）奉らる（㊦80拾）、

(86) 端まで（㊦78初）

(v) 右記(iv)に準ずるが、尾は「ㄣ」。（87）残らじ（㊦79歌）、（88）包みてぞ（末77歌）

(vi) 右記(iv)に準ずるが、尾は「ア」。（89）候らはず（㊦73指）

(ル) ツ―概ね淘居（波）エ・尾エ」に対応する。

(i) 「ㄣ」（秦語）」―「ㄣ」（京松）―「ㄣ」（吟）―「ㄣ」（尾）―「ㄣ」（豊）―「ㄣ」（也）の例。（90）なかりけ

り（㊦末78中）、（91）大納言（末78中）、（92）山桜（末79歌）、（93）旅衣（末79歌）、（94）呉竹の（末77歌）、（95）

名残をば (末77歌)

(ii) 「ハツ(秦語)」ー「ス(京松)」ー「ス(也)」ー「ニ(吟尾)」ー「之(豊)」の例。(96) 掛け (末74拾)、(97) 経正 (末75拾)

(ウ) ミツー次の如く、概ね二淘居「波」尾ニに対応する。

卿の (末78中)、(100) 候ふ (末76折)、(101) 追っつき (末80拾)、ばかりなり (末72折)

(ウ) イー概ね沈「シ」に対応する例が多い。

(i) 「イ(秦語)」ー「(京松吟豊)」ー「シ(尾)」ー「×(也)」の例。(102) 後の(77歌)、(103) 寛(末77歌)

(ii) 右記(i)に準ずるが、は也「一」、吟豊は「×」。(104) 夜なく (79歌)

(ウ) 下ー概ね諸本の「シ」や「下」に対応する。

(i) 「下(秦語)」ー「(京松吟也尾)」ー「下(豊)」。(105) 太刀 (末74拾)、(106) 脇 (末74拾)、(107) 花 (末79歌)

(ii) 右記(i)に準ずるが豊も「シ」。(108) 運命 (72折)

(ウ) 一ウー浮(尾ウ)に対応する事が多いが、張(尾ハ)などに対応する例もある。

(i) 「ウ(秦語也)」ー「(京松吟)」ー「ウ(尾)」ー「×(豊)」の例。(109) 運命 (72折)、(110) 幼少 (78中)、(111) 我が (末76折)

(ii) 右記(i)に準ずるが、也は「シ」。(112) 至る (77中)

(iii) 「ウ(秦語)」ー「/」(京松)ー「ハ(尾)」ー「×(吟也豊)」。(113) まかり(77中)

(タ) 王・ハーそれぞれ右記「ウ」に準ずる事が多いが、「上」に対応する例もある。

(i) 「王(秦語)」ー「ノ」(京松)ー「/」(吟也)ー「ハ(尾)」ー「ル(豊)」の例。(114) 飽かず(77歌、

115) 数輩(末77中)

(ii) 右記(i)に準ずるが、京松は「/」、豊は「ウ」。(116) 高く(75拾)

(iii) 「ハ(秦語)」ー「/」(京松吟豊)ー「上(尾也)」の例。(117) 御琵琶(75口、(118) 御室の(末71口)

(レ) フー概ね救に対応する事が多い。

「フ(秦語)」ー「ス」(京松)ー「ノ」(吟)ー「ズ(尾豊)」ー「セ(也)」の例。(119) 名残(78中)

(リ) フー次の如く、概ね一声に対応する。

「フ(秦語)」ー「ノ」(京松)ー「ノ」(也)ー「引(尾)」ー「ヰ(吟)」ー「フ(豊)」の例。(120) 帯き

(74拾)、(121) 出でられる(末77中)

(ニ) フー次の如く、概ね二声に対応する。

「フ(秦語)」ー「ニ」(京松)ー「ニ」(也)ー「引」(尾)ー「フ(豊)」ー「ヰ(吟)」の例。(122)

申しし(末78中)

(ホ) フー次の如く、概ね三声に対応する。

「フ(秦語)」ー「三」(京松)ー「三」(吟)ー「フ(尾豊)」ー「フ(也)」の例。(123) 算(77歌)、(124) 後の

(77歌)、(125) 後れ(79歌)、(126) なかりけり(78中)、(127) 夜なく(79歌)、(128) 大納言(78中)

(ハ) スー入〔波ス・尾ハ・力〕の類に対応する事が多いが、張^{はり}などに対応する場合もある。

(i) 「ス(秦語京松也)」ー「〱(吟)」ー「カ(尾)」ー「ル(豊)」の例。(129) 候へば(76折)

(ii) 右記(i)に準ずるが、也は「シラ」。 (130) 叩かせ(72下ケ)、(131) 取り(末75下ケ)

(iii) 右記(i)に準ずるが、也は「〱」・豊は「上」。 (132) 候ひ(72折)、(133) 候へども(76折)、(134) おく(末72折)

(iv) 「ス(秦語)」ー「〱(京松吟也)」ー「ハ(尾)」ー「ル(豊)」の例。(135) 水(77歌)、(136) 君(77歌)、

形見(77歌)

(v) 右記(iv)に準ずるが豊は「X」。 (137) 袖(79歌)、(138) 先たち(79歌)

(vi) 右記(iv)に準ずるが京松は「〱」。 (139) 若木(79歌)

(ウ) 引ー概ね引の類に対応する。

(i) 「引(秦語京松也)」ー「〱(吟)」ー「引(尾)」ー「引捨(豊)」の例。(140) 運命(末72折)、(141) 替れども

(末77歌)

(ii) 右記(i)に準ずるが豊は「X」。 (142) 片しきて(末79歌)

(ム) 「〱」ー「〱」京松や尾吟等の「コX」に対応する例がめだつが、そのほか「〱X」や「上X」等に対応する例もある。なお口説以外に現われる例の対応関係はかなり複雑である。

(i) 秦語の「〱」が松京尾の「コX」に対応する例。(143) 家(114口)、(144) 有り(8上45口)

(ii) 右記(i)に準ずるが、前田流本は詞章が異なる。(145) 紋(81口)、(146) 雖も(115口)

(iii) 右記(i)に準ずるが、吟も「〱」。 (147) 射ざり(90口)、(148) 持たせ(81口)

波多野流平曲の古譜本について(奥村)

(ウ) $\langle \backslash \rangle$ 概ね他譜本の $\langle \backslash \rangle$ またはそれに準ずる形に対応する。

(i) 秦語の $\langle \backslash \rangle$ が、京松の $\langle \backslash \rangle$ 、尾の $\langle \backslash \rangle$ に対応する例。(149) 紫地 $\langle \backslash \rangle$ 、(150) 脱いで $\langle \backslash \rangle$

74 拾

(ii) 右記(i)に準ずるが、尾は $\langle \backslash \rangle$ 。(151) 三万 $\langle \backslash \rangle$ 上23 拾

(iii) 秦語の $\langle \backslash \rangle$ が、京松の $\langle \times \rangle$ 、尾の $\langle \times \rangle$ に対応する例。(152) 甲 $\langle \backslash \rangle$ 、幼少 $\langle \backslash \rangle$ 、(153)

磨墨 $\langle \backslash \rangle$ 上21 口)

(iv) 秦語の $\langle \backslash \rangle$ が、京松尾等の $\langle \times \rangle$ に対応する例。(154) 召し $\langle \backslash \rangle$ 、(155) 馳せ $\langle \backslash \rangle$ 、黒かり $\langle \backslash \rangle$

9 上21 口)

(ウ) $\langle \backslash \rangle$ 原則的には諸譜本の用法に準ずる(はずである)が、実際問題としては左記の如き例もかなり認められる。

(i) 秦語の $\langle \backslash \rangle$ や $\langle \backslash \rangle$ の用法が諸譜本のそれに一致または類似する例。(156) 君 $\langle \backslash \rangle$ 、(157) 年 $\langle \backslash \rangle$

(72 指)、(158) 持たせ $\langle \backslash \rangle$ 、(76 折)、(159) 遊ばいて $\langle \backslash \rangle$ 、(77 下ケ)、(160) さて $\langle \backslash \rangle$ 、(77 中)、(161) 住み $\langle \backslash \rangle$

(77 歌)、(162) さしおき $\langle \backslash \rangle$ 、(75 下ケ)

(ii) 同右京松のそれと一致または類似し、前譜本と異なる例。(163) 参れ $\langle \backslash \rangle$ 、(74 下ケ)、(164) 既に $\langle \backslash \rangle$ 、(72 折)、(165) 出でさせ $\langle \backslash \rangle$ 、(72 折)

(iii) 秦語の $\langle \backslash \rangle$ が諸譜本の $\langle \times \rangle$ や $\langle \backslash \rangle$ またはそれに準ずる形に対応する例。(166) 控へ $\langle \backslash \rangle$ 、(167) あはや $\langle \backslash \rangle$ 、(168) 御所へ $\langle \backslash \rangle$ 、(169) 鞭を $\langle \backslash \rangle$ 、(170) 皇后 $\langle \backslash \rangle$ 、(171) 童形 $\langle \backslash \rangle$

(172) 馬より $\langle \backslash \rangle$ 、(173) 十三 $\langle \backslash \rangle$ 、(174) いささか $\langle \backslash \rangle$ 、(175) いたはる $\langle \backslash \rangle$

(71 口)、(172) 馬より $\langle \backslash \rangle$ 、(173) 十三 $\langle \backslash \rangle$ 、(174) いささか $\langle \backslash \rangle$ 、(175) いたはる $\langle \backslash \rangle$

指)、(176) 運命 (㊦㊧㊨76口)、(177) 候ひて (㊦㊧㊨72指)、(178) 参り初め (㊦㊧㊨72指)

(iv) 秦語の「 \wedge 」が諸譜本の「 \wedge 」またはそれに準ずる形に対応する例。(179) 袋 (㊦㊧㊨75口)、(180) 經正 (㊦㊧㊨75口)、(181) 滋藤 (㊦㊧㊨74拾)、(182) その勢 (㊦㊧㊨79拾)

(v) 秦語の「 \wedge 」が他譜本の「 \wedge 」またはそれに準ずる形に対応する例。(183) 薩摩守 (㊦㊧㊨61口)、(184) ひた甲 (㊦㊧㊨61口)、(185) 来れり (㊦㊧㊨61口)、(186) 候らはれ (㊦㊧㊨71口)、(187) 候らはば (㊦㊧㊨76口)

(㊦) 語の譜記が秦のそれを簡略化したと見られる例。

(i) 「 \wedge 」(秦)の例。(188) その (㊦㊧㊨74下ケ)、(189) 宇佐 (㊦㊧㊨81口)、(190) 行き (㊦㊧㊨79歌)、(191) 半天 (㊦㊧㊨122下落)、(192) 持たせ (㊦㊧㊨79拾)、(193) 参らせ (㊦㊧㊨71口)、(194) 総劇 (㊦㊧㊨71口)、(195) 指し (末79拾)、(196) 申され (末76口)、(197) 御室の (末71口)

(ii) 「 \wedge 」(秦)の例。(198) 大納言 (㊦㊧㊨78中)、(199) 一首 (末76下ケ)

(iii) 「 \wedge 」(秦)の例。(200) 指し (㊦㊧㊨79拾)、(201) 御室 (末71口)

(iv) 「 \wedge 」(秦)の例。(202) 召され (末75拾)

(v) 「 \wedge 」(秦)の例。(203) 立ち (㊦㊧㊨73指)、(204) 經正 (㊦㊧㊨77下ケ)、(205) これ (末120初)、(206) 硯 (末77下ケ)、(207) 經正の (末79下ケ)

(vi) 「 \wedge 」(秦)の例。(208) 御室 (㊦㊧㊨75拾)、(209) 花 (末79歌)、(210) 早 (末72折)、(211) 参らせ (末76折)

- (vii) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (秦) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (語) の例。 (212) ダイボサツ 大菩薩 (㊟100指)、(213) 入れさせ (㊟100指)
- (viii) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (秦) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (語) の例。 (214) ミヤ 宮 (㊟77歌)、(215) 預かつて (㊟75折)
- (ix) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (秦) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (語) の例。 (216) 御室 (㊟71口)
- (x) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (秦) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (語) の例。 (217) 給ひ (㊟86口)、(218) タイ 帯し (㊟115口)

(㊟) 秦の譜記が誤記かと見られる例。

- (219) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (秦74下ケ) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (語)、(220) 候らはば $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ (語)、(221) ウチ 中 $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$
- スア(秦77歌) $\left[\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \end{array} \right]$ ハア(語)

説明

* 右記(A)の詞章対照例において、(1) (2) (12) の例はそれぞれの如き意味を表わす。

(1) 秦卷7下72頁「つかまつる」の部分は語も同様だが、京松尾吟也豊や㊟㊟㊟諸本では「つかまつり候ひし」となっている。

(2) 秦7下73頁「候ひぬ」の部分は語も同様だが、京㊟諸本では「候へば」とある。

(12) 秦7下41頁「主に」の部分は語も同様だが、京㊟の諸本では「上洛の時主に」とある。

* つまり↓印は波線部分のみに関する異同を示す。

また×は、その部分の詞章(他本に存する詞章)が欠けている事を示す。

* ここでは秦の卷7下の例のみを掲げる故、各用例については一々「7下」と記さず頁数のみを示した。

* 各本の略称は次の如くである。

秦—秦音曲鈔、語—平家語本、京—京都大学蔵波多野流譜本、松—松岡仲良写波多野流譜本(東京大学蔵)、尾—

尾崎正忠氏蔵平家正節、也―横井也有写平語（横井緑時氏蔵）、豊―伝豊川檢校本（早稲田大学演博蔵）、吟―平曲吟譜（故岩淵悦太郎氏蔵）、カ―覚一本（岩波大系本）、ヨ―葉子十行本（朝日古典全書本）、ト―下村時房刊本（古典全集本）、ルー流布本（元和七年版本）

各本の性格等については『平曲譜本の研究』第一編なども参照の事。

* (B) 譜記対照例の示し方も概ね右記(A)の場合に準ずるが、さし当り(イ)の(1)の例は次の如き意味を表わす。

秦 7 下 77 頁中音の「至る」に關し、その第二拍部分の譜記を見ると、秦語は「ㄣ」、京松也は「ㄣ」、吟は「ㄣ」、尾豊は「ろ」の如き対応を示す。

* ここでも用例は概ね秦の卷 7 下からとった故、その場合は頁数と曲節名のみを示した。(144) の例の如く他の巻をとり上げた場合は、すべて(8 上 45 口) の如く示した。

* 譜本の略称も、前記詞章比較の場合にはば準ずるが、そのほか次の如き略称を用いた例もある。

波―京松などいわゆる波多野流本の総称。前―いわゆる前田流本の総称、具体的には尾也豊吟など。

* 比較に当っては、管見の範囲内で大いの譜本をとり上げたが、ここでは前田流本の一部を省略した場合(例えば(143) 以下の諸例など) もある。それらを一々とり上げても、煩雑化するばかりで余り積極的な意味がないからである。ただし京松(波多野流本の代表) 及び尾(前田流本の代表) の三者は常にとり上げた。

* 節ハカセは原則として「」印でかこんだ。「×」は譜記がない事を示す。

* 曲節名に關しては次の如き略称を用いた。口―口説、指―指声、折―折声、初―初重、中―中音、三―三重

* 譜記比較例に關し、(A) の場合の(イ) (ㄣ) の如き分類をする事は容易でないが、最後の(イ) (ㄣ) の諸例は、いずれも秦と語の譜記差に關するものである。

その他に關しては、(イ) (ㄣ) など最初に掲げたものは秦語両書のみの特異性と見るべき場合が多く、(ㄣ) (ㄣ) など後に掲

げたものは他譜本の譜記と一致または類似する場合が多い。また(ム)の諸例は、他譜本とよく似た節ハカセの用法に関するものである。ただしそのような意味での(イ)の区別は、必ずしもはっきりしない場合がある。

* そのほか詞章や譜記の比較対照例及びその示し方については、『平曲譜本の研究』176頁を参照の事。

〔6.2〕 参考——秦音曲鈔・平家語本・松岡仲良写波多野流本の一部影印

經正都落

口説

修羅れちまほほの痛きものなほ思れ見
 化の八幼女の時よりたぬきれ思の思
 思重敷くゆりれまふ思の思劇中
 ほど其の思思思思思思思思思思思思
 思思思思思思思思思思思思思思思思思

同

72 頁

飛て下[↑] 門^ノノ敵^ヲを自^レ高^クら^ウ。戸^ノヲ^ク閉^ス。
 折^レ 我^レ既^ニ帝^ノ於^テ以^テ出^スを^レ始^メゆ^ル。
 ぬ^レ二^ノ門^ノの^レ運^命今^レ自^レ早^クを^レ果^ス惟^ニ也^ナ。
 只^レ以^テ重^ク又^レよ^ク只^レ表^ノの^レ余^レ及^テ計^ス。
 指^レ八^ノ歳^ニ年^ヲ始^メ入^ル。長^ク而^テゆ^ルひ^ハ十三^ニ。
 て^レ先^ニ服^ヲ修^ム。近^クハ^レ節^ヲ相^ノ骨^ヲ打^ツ。夏^ノの^レゆ^ル之^レ。

花言

經政部書

修理うぶまは、
居まの亮經政い印の所よ
仁和寺の住家う所所也

平家語本

卷14の3頁

音於とくはらむは、
澄達の中も、
吃とらひ、
海白具とて仁和寺

同

4頁

依^ヨて^テ花^ハ交^カ経^キ盛^{セイ}の^ノ嫡^チ子^シ。皇^ス后^コ宮^ノの^ノ真^マ理^リ心^{シン}ハ^ハ切^キ
 り^リの^ノ時^{トキ}も^モ。仁^ニ和^ワ守^シれ^レ所^所室^室の^ノ西^シ行^行に^ニ童^童飛^飛小^小
 て^テ惟^唯望^望き^キる^ルか^カ。か^カる^ル志^シ家^家乃^乃中^中小^小も^モ。こ^コの^ノ志^シを^ヲ
 友^{トモ}友^{トモ}思^シひ^ヒ生^ナれ^レと^ト。侍^{サマ}を^ヲ去^サり^リ。石^{イシ}見^ミり^リて^テ。仁^ニ
 和^ワ守^シ屋^ヤへ^ヘ池^{イケ}を^ヲあ^アる^ル。君^{キミ}を^ヲ馬^{ウマ}を^ヲあ^アり^リて^テ。門^{カド}を^ヲ
 打^ヒつ^ツ。こ^コの^ノ志^シを^ヲあ^アり^リて^テ。石^{イシ}見^ミり^リて^テ。仁^ニ

朝夜を寝ても休みのなき一服の酒飲まぬか
 月累の浮世まをるるもは只君の内名ゆ
 計りもまゝの年の此世あ一幸り娘ゆ
 ナニで元波傳りゆひと聊お清りりゆの
 心んを介白心におおと立去るもゆを
 今今日流下西海千里の波海に赴ゆ